

秋

白秋全集
33

鑑賞指導

1

白秋全集 33 第五回配本(第Ⅱ期二五、三七卷・別卷一)

一九八七年五月八日 発行

定価三六〇〇円

著 者 北 原 白 秋

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
発行所 銚子 岩 波 書店

電話(三上)六四二二
振替東京六二六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

『鑑賞
指導』

兒童自由詩集成』

目次

『鑑賞 指導』兒童自由詩集成

序 五

解 說 九

兒童自由詩運動の經過概略 九

本集解説 三

自由詩以前 自大正七年八月
至大正九年十二月 九

自由詩以前(1)(三〇)

自由詩以前(2)(二九)

大正十年 元

一月(四〇)

五月(四八)

二月(四二)

六月(五〇)

三月(四三)

七月(五一)

四月(四六)

八月(五一)

九月(癸)
十月(壬)

十一月(癸)
十二月(壬)

大正十一年 七

一月(壬)

八月(癸)

二月(癸)

九月(癸)

三月(甲)

十月(甲)

四月(乙)

十一月(乙)

五月(丙)

十二月(丙)

六月(丁)

七月(丁)

大正十二年 一〇

一月(戊)

六月(戊)

二月(己)

七月(己)

三月(庚)

八月(庚)

四月(辛)

九月(辛)

五月(壬)

大正十三年 一四

一月(癸)

三月(癸)

二月(甲)

五月(甲)

六月(二五)	十月(二四)
七月(二六)	十一月(二七)
八月(二七)	十二月(二八)
九月(二八)	

大正十四年 二

一月(二八)	七月(二九)
二月(二九)	八月(三〇)
三月(三〇)	九月(三一)
四月(三一)	十月(三二)
五月(三二)	十一月(三三)
六月(三三)	十二月(三四)

大正十五年 三

一月(三一)	七月(三六)
二月(三二)	八月(三七)
三月(三三)	九月(三八)
四月(三四)	十月(三九)
五月(三五)	十一月(四〇)
六月(三六)	十二月(四一)

昭和二年 二四一

一月(四)	八月(五)
二月(四)	九月(五)
三月(四)	十月(五)
四月(四)	十一月(六)
五月(五)	十二月(六)
七月(五)	

昭和三年 二六五

一月(六)	七月(六)
二月(六)	八月(六)
三月(七)	九月(六)
四月(七)	十月(六)
五月(七)	十一月(六)
六月(七)	十二月(六)

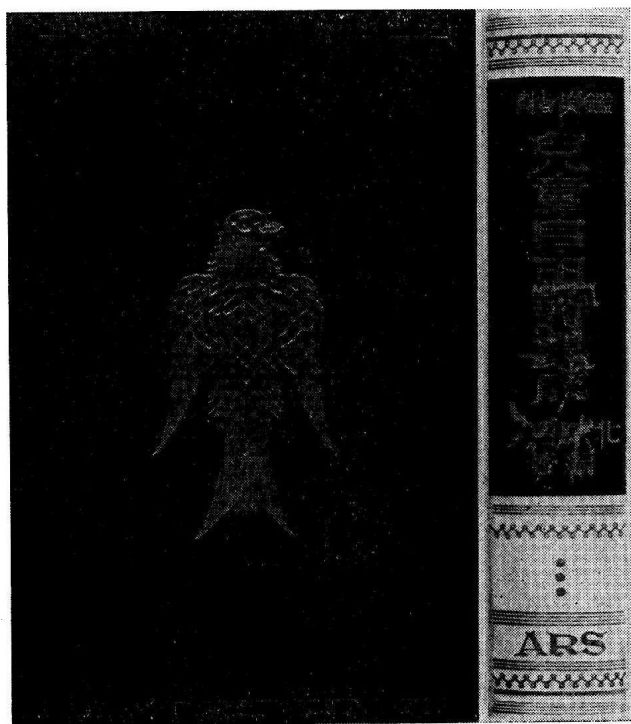
昭和四年 二九五

一月(六)	三月(六)
二月(六)	

児童自由詩解説 三〇三

一 序 論(三〇四)	五 成人と児童の觀照(三六)
二 幼兒の詩(三九)	六 兒童の自然觀照(三四)
三 兒童自由詩本論(三六)	七 兒童の生活感情と詩(三四)
四 鑑賞の種々相(三三)	
参加学校	三六
後 記	三七

『鑑賞
指導 児童自由詩集成』



〔表紙〕

〔昭和8年10月20日
アルス刊〕

北原白秋編著

鑑賞指

兒童自由詩集成

星
分
分
分
分
分
分
分
分
分

アルス刊

〔本扉〕

序

日本に於ける児童自由詩の一大詞華集として、更にその鑑賞と指導との史的記録として、茲に私は本集を公刊する。

本集こそは日本の児童にとり、その開発者であり指導者である私にとり、全国に於ける私の共力者たちにとつての、乃ち我が児童自由詩運動に於ける第一の大なる記念塔である。私は此処に此の記念塔をうち建てる。児童自由詩開発以来十七年、漸くにして私は私たちの謙虚な歎びを此の塔影と共に映像するを得た。此の眼前の事実を觀てほしいのである。

私は身を挺した、信じた、行爲した。

しかしながら、再び私は言ふ、此の今日の集大成は、私のみの個の業績では決してないことである。詩の創作者である児童たちは勿論であるが、此の私に共鳴して、彼等を啓発し指導し來つた全国の小学教師並びに父兄たちの愛とよき認識と熱との層積がかく光輝あらしめたものと言へる。殊に此の自由詩運動に於ては多大の犠牲が払はれてゐる。少くとも日本に於ては、私どもの芸術教育の新風と自由とは、些か時代に先駆し過ぎた。その始め、私を中心として聚るところの人々、学校は、多くは異端者としての曲解を受けた。その後にも到つても頻々たる迫害はその教職の上にまで及んだ。折角の努力が却つて白眼を以て酬いられた。師は追はれ児童は逼塞した。光明から転落した学校がいくらあるかしれなかつた。しかもまた

後から後からと競ひ興つて既に大勢は決したのである。本集を年代順に翻読する向には幾多の推移と変遷と興亡と転開とが容易に看取され得るであらう。運動当初に興つた曩の児童たちは或は大学を卒へ、或は母となつて今は第二の児童の世界を詩を以て薫醸し育英しつゝある。之を思ふと私は深い感慨に撲れたる自身を幸福とする。短いやうでも永い年月であつた。

本集こそはまた、私が扱つたかの『赤い鳥』の自由詩集だとも詩史だとも言へる。此の児童自由詩の本道はまさしく『赤い鳥』を直貫してゐる。日本に於ける児童自由詩の運動は、正しく此の『赤い鳥』より産卵され生長した。此の回顧と感謝とは此の後と雖も常に新らしく私たちの蒼空に羽ばたくであらう。

光栄あれ、『赤い鳥』

私は詩を思つた。児童の情操の噴水を、新鮮なる感覚の燭光を、その豊満なる感情の花苑を、その澄明なる叡智の星を。私には私心は無かつた筈である。私は驚き、私は恐れた。しかも却つて児童に教へらるゝところの多々を学んだ。曾ては児童は成人を模した。童謡体をも成した。しかしながら遂に彼等の本然の感動律を自由の表現に移すに及んで、個の生来を確実に放つた。彼等こそは生来の詩人であつた。誘引し批判し指導し來つた私の此の業績と雖も、決して私のみの力では無い。よくも児童は此の観照と表現の高さにまで自己を昂揚さしてくれたと感激される。

児童自由詩教育の任に進んで当り、その児童自由詩の称呼をも定めた私であるが、私は夙くから此の運動を開放してゐる。私に私心は無い。興るべきは大いに興るべきである。日本児童の詩境の膨大は、全世界の詩の膨大である。日本の現在及び将来の児童の為に、此の詩の自由教育を弘布することは私の本願である。『赤い鳥』以外に於ても、あらゆる諸方の協賛と新人の擡頭を熱望する。たい心ひそかに杞るゝこ

とは、自由詩に対する認識と、鑑賞能力の如何である。精神と態度の如何である。道は謬らるべきでない。本集が或はその基準たり羅針であり、私の謂ふ児童自由詩の萌芽の本地であるものならば、また或は何かの参考の資として取つて以て、更に高く広く自由に児童の詩魂を揺蕩さしてほしいのである。私のまた至らぬところも真実の意味に於て仔細に教示して戴きたいと思ふ。

詩は今や児童のものとなつた。日本の児童は詩を識り、詩を成し得る自覚の上に、その己れの詩を成しつつある。しかもまたその羽翼の羽ばたきは無心の幼児にまで搏動を示唆してゐる。此の日本の児童のごとく全国を通じての詩への参加は、果して東西の何処の児童に求められ得るか。爽快でないとは言へないのである。之等の児童を通じて日本民族の優秀性を思ふ者は私ばかりではないと信ずる。

諸君、私たちの児童自由詩運動の第一の記念塔はこれだ。

昭和八年十月

東京砧村にて

北 原 白 秋

